

今回扱うアニメ作品： 竜とそばかすの姫 その7

本日のテーマ：すずが主体性を確立すること

前回のおさらい

前回の放送で、すずが『U』の中で As であるベルの姿ではなく、すず自身の姿で「はなればなれの君へ」という歌を歌った。それは『U』のなかで、親密な関係になったモンスター型 As である竜の再会を切望することであり、それは、現実の世界で父から虐待されている恵君に交流したい思いを綴った歌であった。

それは、これまで『月の裏側（ヒロちゃん評）』のように外界の世界から距離を置き、殻に閉じこもっていた、すずが殻を破り、ありのままの姿をさらけ出した瞬間である。それは彼女が主体性を確立したとも考えられる。

その後のシーンは主体性を確立した、すずが、恵君に実際に会い、勇気を与え、父と和解するという、責任ある一人の人間として一步を踏み出すシーンへと繋がっていく。

幼い頃に母を失い、自分を責め続け、人前で歌が歌えず、内向的だった、すずが、どの様にここまで成長していったのか？

①ヒロちゃんに招待された『U』の存在

すずはベルという As（アバター）になり、その空間の中でイキイキと歌える様になり、たちまち『U』の中で歌姫として注目を集める様になっていく。この一連の流れは幼少期に途中、失ってしまった潜在空間を取り戻したとも考えられる。

②ルカちゃんとの対話 竜との交流

1) 『U』を通して、現実でもイキイキとした高校生活が送れる様になった、すずは、しのぶ君と対等になりたいと感じたが、しのぶ君がルカちゃんと話している姿と比べて自分が見劣りしている感じている自分を発見することになる。

それこそが、自身が抱くエディプスコンプレックスに気づき、向き合うことである。

（怒り 恐れ 悲しみ etc の陰性感情でもある）

2) そこで『U』のなかで竜が出現する。それこそが、すず自身の抱く陰性感情であり、竜との交流で、優しく、傷ついている竜の姿を知り、ひいては自身の心の痛みを徐々に受け止めていく。

3) ルカちゃんとお互いの好きな人について話し合う。ここでルカちゃんは完全無欠のヒロインではなく、彼女も、すずと同様にコンプレックスを抱えた一人の女性であることを知る。そして、すずも自分の内面を語り、自信が殻を破って、憧れのルカちゃんと対等に関わる様になっていく。

→けれどもこのシーンではまず自身が自立した大人になる過程で抱く、不安や恐れ、そして悲しい感情という避けられない感情が置き去りにされている様に感じられる。

③まず自身の姿を『U』で曝け出すということ

1) しのぶ君に偶然でくわし、まずは自分の思いを伝えようとしたら、しのぶ君に『U』の中のベルとまずが同一であるということを指摘される。見透かされたまずは非常に動揺してし、しのぶ君がいる場から立ち去り、泣き崩れてしまう。

依然として『U』という潜在空間を脱して現実世界に主体的に関わることに、まずは、怯えている。つまり自立した一人の大人になる怖さがあり、まだ主体的になれない怖さがある。(しのぶ君の直面化がまずの心を突き動かしていくきっかけとなる)

→そこでヒロちゃんから竜の城がジャスティン達によって焼き払われ、『U』の中で竜が大変なことになっているという知らせを受ける。

2) 『U』の中の竜が現実では父が虐待を受けていた恵くんという 14 歳の少年であったことを知る。当初彼に疑念を抱かれ拒絶され、怒りをぶつけられるが(「助ける、助ける、助ける。もうウンザリなんだよ！！」)、まずは苦悩する。しのぶ君からまずの姿で歌う様強い促しを受ける。そのことでまずは苦悩する。

→決意したまずは、『U』内でベルのオリジン 自身の姿を曝け出し、そこで歌い始める。

→『U』のなかで、現実のすずの姿をさらけ出すということは、『U』という潜在空間での殻を破り、
すず自身が主体性を確立し、現実世界に向き合っていくことを意味する（このことをウィニコット
は『脱錯覚』と呼んでいる）。

④「はなればなれの君へ」を歌うこと

きらめきの花 夢の宝石

世界は美しい

臆病と不安 縛られるけれども

強く優しく なれたら

あの空は 戻らない

ひとりでは 生きられない

あいたい もう一度

胸の奥 ふるえてる

ここにいるよ とどいて

はなればなれの 君へ

目を閉じた 時だけ

会えるなんて 信じられない

あいたい

はなればなれの 君へ

【考察】

この歌詞は As としての竜に向けて歌った歌であるが、亡くなってしまった母の思慕の念を綴った歌詞のようにも感じられる。そしてすす自身が一人の女性と成熟し、母のように他者を受け入れようとする決意にも感じられる。

すすがこの歌を歌う中で、幼い頃に中洲に取り残された子が「助けて」と泣き叫び、周囲の大人達は誰も手出しできず、狼狽している中で、母は覚悟を決め、懇願するすすを振り切り、「だめだよ。行かなきゃあの子が死んじゃう。」と言って、ライフジャケットを着て、その子を助けたことを思い出し、すすはハッとする。

母を失ったことは非常に悲しい思いだったかもしれない。一方で自分も川に入って行こうとすることを引き止めたしのぶ君やこれまですすを陰ながら見守ってきた周囲への感謝、そして母の偉大さを感じ始めているように感じている。これはまさに抑うつポジションへの移行である。もう一度ボウルビィの喪の作業を見ながら歌詞を考えてみたい。

悲哀の心理過程（喪の作業）【J.ボウルビィ】

①無感覚・情緒的危機の段階（激しくショックをうけている）

②思慕と探求・怒りと否認の段階

（対象喪失を認めず、失った対象が存在するように振る舞う）

③断念と絶望の段階（激しい失意、抑うつの体験）

④離脱・再建の段階（喪失を受け入れ、立ち直り始める）

あの空は 戻らない ひとりでは 生きられない

あいたい もう一度 胸の奥 ふるえてる

という歌詞は思慕の念を表しており、②にとどまっている様にも感じられる。

しかし、冒頭部のすずが発した言葉

『母さんは、なぜ私を置いて川にはいったのか？なぜ私と生きるよりも、名前の知らないその子を助けることを選んだのか？なぜ私は一人ぼっちなのか？なぜ、なぜ、なぜ』

と比べる。後者のすずの言葉は何か怒りがあり、そこには母という対象がいないのでなく、悪い対象として母が存在し、そこに怒りが強く存在している様に感じる。つまり喪失を受け入れられていないのである。

一方で、「はなればなれの君へ」の歌詞ではもう母がいなくなってしまったことを受け入れ、回想している様にも感じられ、④の段階にいつている様に感じられる。それは妄想分裂ポジションから抑うつポジションへの移行であり、その移行は愛と憎しみの葛藤であり、すず自身のもつ愛が憎しみを収められる様になったと考えられる。

また歌の題名の「君」が竜であり、母であるならば、母と自分が対等な大人の存在になりつつあるという意味もあるかもしれない。

まさにこの心の変化こそが一人の大人として成熟していく姿が描かれていると考える。

そしてそのことが次の展開である、恵くんに会いに行くということにつながってくる。ある種ここからは一人の成熟した大人となったすずが、どう周囲の人と関わっていくのか？というエピローグのようにも感じられる。

7) 恵くん会いに行くこと

『U』でベルをアンベイルし、すずのありのままの姿をみせ、『U』では竜の姿であった恵くんへすずがベルであることを認められ、再び二人はネットを通じてつながる。しかしその画面に恵くんの父親が現れ、恵くんと知くんに暴力をふるう。その場所がどうにか判明するも、誰も彼らにできる術がなく、狼狽しているなかで、すずは駆け出し、恵くんのいる元へと向かっていく。

まさにこれは幼い頃に中洲に取り残された子をすずの母親が川に入って行こうとするシーンと重なる。

すずが抑うつポジションに移行し、一人の成熟した大人になるなかで、主体的になり、母と同じような行動をとったと考えられる。

そして夜行バスに飛び乗り恵君の元に駆けつける中で父と SNS でやりとりするシーンを取り上げる。

すず：父さん、何も言わなくて出かけてしまったけど、ちょっと遠くに行ってきます。

父：合唱の皆さんたちからメールがあった。

すず：いつも勝手な娘でごめんなさい

父：事情があるんだね

すず：大事な人が、困っている。

父：君は、その人の力になろうとしている。

すず：でも、私なんかが力になれるのか、わからなくて

父：君は、かあさんが突然いなくなって、寂しくて、ずっとそれを我慢してきた。とても辛かった

と思うけど、でもこうして親切な子に育った。人の気持ちがわかる子に育った。

父：すず。君は、かあさんに育てられて、こんなに優しい子になったんだよ。

父：その人に優しくしてあげなさい。

すず：ありがとう

【考察】

この SNS のやり取りで、すずは自身が、とにかく恵君に会いに行くということが自分の使命であると、主体的に自分の突き進むべき道をすでに固めている。一方で、自身の無鉄砲な振る舞いで父を心配させてしまったのではないかと危惧している。そしてその気持ちを父が受け止める中で、すず自身の葛藤を父にほんのわずかな言葉だが、キチンと吐露している。ここは今まで父を必要以上に怖がり、迫害的に感じていた（妄想分裂ポジション）のすずの心性が大きく変わり、ある種対

等に父に自分の思いを語り、二人の距離がこれまでになく近くなっている。ある種のすずの成熟を表している。その後も父の言葉は非常にこれまでのすずの心に寄り添った言葉であり、胸打つ言葉である。その文面を読み、すずは涙をこぼしたが、それだけ父の言葉がずすに響いたのだと考えられる。

ここで父という対象がすずにとって迫害的对象ではなく、自分に寄り添い、導いてくれる対象なのだということを理解した瞬間と考えられる。

すずは恵くんの住む街にいき、実際の彼らに出会い、抱きしめる。そして恵くんの父親が怒った様子で出て、恵くんをすずから引き裂こうとする。

そこに覚悟を決めて、すずは立ち上がり、父親に対峙する。父親は拳を構えて威嚇するが、みじろぎもしないすずの姿に動揺し、逃げ出すように戻っていく。

このシーンは色々賛否両論分かれるシーンであるが、すずが恵くんの父親に対峙するなかで、すずは主体性を持った大人の女性である一方で、恵くんの父は彼の子供達を仲良くやっているという姿は偽りの姿で、すずによって、ある意味アンベイルされ、「大人でも親でもないただの弱々しい哀れな男」であるということが露呈され、彼はそれが受け入れられず、逃げ出してしまったと感じられる。そのことに恵くんはハッとして

「僕も立ち向かわなきゃいけないって思った。だから闘うよ。」

と言った。そして知くんは

「ベル、キミは、キレイ」

このシーンはなにか「君の名は。」と町長である父と主人公の宮水三葉が対峙するシーンと非常に重なる。

8) 恵くんとの出会いの後、すずはどう変わったのか？

①恵くんとの出会いの後、帰り際、自宅近くの駅である伊野駅のホームに降りた時に父が迎えに来ている。

父「……今日、ごはんは？」

すず「……食べる」

父「じゃ、たたき、食おう」

【考察】

小説版ではこのやり取りの後に

たったこれだけのやりとりをするのに、一体、何ヶ月、何年の時間を費やしたのだろうか。でもいいんだ。やっと言えた。

と書かれている。

これはすずが自身が思春期の中でエディプス葛藤を経て、父という存在を受け入れたとシーンと考えられる。そして父が作ったご飯をこれまでは「いらない」と言って拒んできたすずだが、それを「食べる」と言ったこと、つまり父を受け入れた象徴のようにも感じられる。

すずは恵君との関わりがあるまで、エディプス葛藤から距離を取るように父から避けてきたが、視聴者側から見ると父は非常に温厚に見えるが、もしかしたらすずの内的世界では、父を恵君の父のように非常に怖い対象（自分を脅かす悪い対象：つまり自身の悪い内的対象の投影でもある）と捉え、怯え、距離をとり、また、それがすず自身の強烈な超自我となり、彼女自身苛まれてきたのかもしれない。しかし恵君の父と対峙することで、すず自身の超自我は穏やかなものになり、現実世界を伸び伸びと受け入れられるようになったようにも考えられる。

②その後、皆と一緒に河原沿いを歩くシーンでしのぶ君に言われたシーン

「あの子たちを守るすずを見て、なかなかやるなと思った」

「カッコよかったぜ」

「ああ、やっと解放された。もう守るんじゃなくて、これから普通に付き合える気がする。昔からそうだったんだ」

しのぶ君のこのセリフは上記の考察の通りにすずが、恵君との出会いを通じて自身のエディプス葛藤に向き合い、成熟し、しのぶ君と対等な立場で関われるようになった言っているように感じられる。

そしてそれが青春の群像を爽やかに瑞々しく描いた作品となっている。